

國學院大學學術情報リポジトリ

発題4関西国際大学における初年次教育の取組：
『学習技術』の展開を例として(平成二十四年度國學院大學人間開発学会第四回大会公開シンポジウム：
学生の可能性を引き出す初年次教育)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上村, 和美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001240

発題④

関西国際大学における初年次教育の取組

—『学習技術』の展開を例として—

上村 和美

関西国際大学の上村でございます。本日はお招きいただきましてどうもありがとうございます。本日このようにこの席に立たせていただくには、成田先生とのつながりがございます。成田先生の前任校が関西国際大学ということで、実は今日ご紹介いたします「学習技術」という授業も、成田先生が本学におられる間にはご担当いただいておりました科目ですので、ちよつと懐かしい感じで聞いていただけるのではないかと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

発表の流れといたしましては、最初に少しイントロダクションのお話をさせていただきます、冒頭に成田先生のほうからご紹介ございましたが、この「知へのステップ」というテキスト、初年次のテキストとして現在、他大学でもたくさん使っていただいているんですが、それができるまでのプロセスのお話をいたします。それから、これを使って関西国際大学ではどのように授業を展開しているのかというお話、その辺りを授業の内容と教材と、それから評価についてのお話、最後にまとめというような流れでお話をさせていただきますと思います。

実は、こちらに何う前にお食事をいただいたのですが、その時に藤田先生とお話をしているときに、「三木市ってどこです

か」っていうふうに（笑）。お尋ねがありました。それはもう絶対ある質問ですので（笑）。関西圏でも必ずある質問です。兵庫県の三木市なんですが、皆さん多分神戸だったらお分かりだと思ふんですが、神戸のさらに六甲山系越えまして、北のほうに三木市というところがございます。と言いましても、大体三宮から三十分ぐらいの圏内ではあるんですが、気温が三度ほど違いますので、三木のほうで雪が降っていても三宮は晴れているというぐらい、ちよつとお天気が違います。平成一〇年に兵庫県の三木市に開学をいたしました新しい大学でございます。それより前は関西女学院短大という名でした今は三木のほうのキャンパスは人間科学部がございまして、平成二十一年から、尼崎という非常に便利なところに教育学部が移りまして、現在ツインキャンパスという形で運用しております。私は普段は三木市におりますので、今朝も三木から新神戸まで出まして、7時22分ぐらいですかね、家を出まして、8時22分の新幹線に乗って、こちらにやってきました。このような大学です。で、國學院さんに比べますと歴史も浅いですし、学生数も大体二千人弱ということですので、小規模の大学ゆえにできることというのが恐らく今日お話しする中のメインになってしまうと

思います。少しはご参考になればいいかなというお話もあるなと思います。

「学習技術」ということで、これちよつと古い新聞記事になるんですが、読売新聞さんが一度授業見学に来られたことがありました。この時期、他大学の方もたくさん授業見学に来られました、普通に開講している授業をご覧になれるんですが、実際に、学生の後に座られて、一緒に授業を受けられ、このような形で紹介をいただいたというような経緯がございます。

この「知へのステップ」というのは、くろしお出版という出版社から出版されました。きょうは多分関係者の方いないからいいですね。当初は、本学が作って、本学が使っていたというような感じでしたが、徐々にいろいろな団体などで、口コミで広がっていったようです。これは後ほどお話をいたしますが、教科書を作るだけではなくて、これに伴う、ワークシートと、教授資料という副教材と一緒に開発しました。その辺りが目玉ということもありまして、徐々に採用数が伸びてきてまして、二〇〇二年からいくと二十三倍の増加になりました。まあ最初が少なすぎるのですが。今、大学数だけでいくと、大体二〇〇ちよつとぐらいの大学で、採用をしていただくまでに育ちました。私たちとしては、これを開発したのが学習技術研究会というチームなんです、何年かに一回、ウィンドウズのバージョンが代わると中の教科書のパソコンの画面が変わるので、改訂改訂という形で、今一番新しいのがこの版ということになります。

今日のお話とも関連するんですが、そもそも導入教育と初年次教育というものがどう違うのかというあたりですね。これ

まったく切り離して考えられるものでもないんですが、一応、神戸大学の川嶋先生がこのように整理をされています。FYEということ、ファーストイヤーエクスプレインスの日本語訳ということで、いわゆるアメリカではフレッシュマンセミナーで用いられるような考え方で、導入教育と言えはやはり、専門教育へのイントロダクションにつながるものであり、一般的にいうリメディアル教育です。このあたりが人文系の場合は、ちよつと希薄ですね。工学部の場合は数学の基礎とか、そのあたりがリメディアルということではっきりわかるんですけども。人文系の場合は、たとえば読み書きとかという部分が、どこまでリメディアルになり得るかということになると、ちよつとそのあたりが日本の場合にはあやふやな部分もあるかと思えます。

初年次教育という言葉が定着していき、初年次教育学会というものもできてまいりました。大学に入学した時点と、あるいは、編入の場合は他大学からのという考え方もありますが、その円滑な移行を図る。そして学習だけではなく、人格的な成長に向けて、大学での学問的、社会的な諸経験を成功させるべく、大学新入生を対象に総合的に作られた教育プログラムのことを指すと、整理をされております。今ではこの概念が一般的にはなってきたかと思えます。

さあ、それではここから、資料のほうは2枚目のほう、裏のほうにまいりまして、この「知へのステップ」の誕生までの変遷ということになりますが、実はこれはいきなり教科書を作りましたよというって始まったわけではありません。本学は開学と同時に学習支援センターを立ち上げていました。これはアメリ

カでいうところのラーニングセンターですね。最初は本当に手探りでやっていました。一年たったところで、当時私もまだ若手の若手でしたので（笑）一年たったところで何か自分たちで学生たちに向けてのいいプログラムが作れないだろうかというのが最初の発想でした。そのころ、たとえば、私も1年生を担当していて、五月ぐらいに面談をする、「最近授業どうかなあ？」みたいな話をしていると、「うーん、先生授業ね、すごい難しいね」みたいなことを言うんですね。「じゃあどういふところが難しいの？」っていう話をすると、「だって先生、黒板にね、何にも書いてくれないから、待ってたら授業終わってしまったわ」「えっ？」と思ったんですけども、彼らのこれまでのノートテイクというのは、彼らは「書かれたものを写す」ということですよね。いわゆる「コピーをする」というのがノートの取り方だと思っています。かたや、大学の教員はずっと大学で教えているので、大学というのはそういうふうなきれいな板書っていうのはしないものが普通だと思っているわけです。お互いがこれうまくスイッチングできてない状態です。学生さんにも、いやいや、大学に入ったら高校みたいなノートの取り方じゃないんだよっていうことを教えてあげると多分、それはそれでやってくれると思うんですが、そう言われてみればそういうことをちゃんと教えてないよねっていう話になりました。

同時に、たとえばレポートの書き方にしてもそうなんですが、これは学生のアンケートの中からも出てきたんですが、まず「レポートを出しなさい」と言われたときに、「感想文とどう違うのか」ということが明確に説明できる学生さんどれぐらいいる

だろうか。で、教員のほうも、その辺りをちゃんと説明して1年生に課題を出してるだろうかというような問題が出てきたんですね。ただし、これは一九九九年の話で、もう十五年ほど前の話です。その当時はそういうことを言うと、ほかの大学の先生は、「そんなの大学に来たんだから当たり前でしょ」というように言われていましたし、「そういうことを教える必要性なんてあるのか」と言われていたような時代です。そんな時代のとときに、「講義の攻略法、要点はこうしてつかめ」というなんかすごいかっこいいですけども、こういう、ノートの取り方の講義というのを九十分の一コマですね、単位にもならないんですけども、ゼミなんかと連携しながら提供していくことを最初の段階にやりました。二年目にそれを高等教育研究所のプロジェクトに起こしまして、「導入教育のための教材開発研究」としました。それをさらに科研費のプロジェクトに格上げしまして、最終的に教科書ができたというわけです。そういう流れですので、もともとプログラムから立ち上がったものだったのです。

大学生にとって学習に必要な技術ということで、どんなコンテンツかということで、大体この五つに分けて考えようというのが当初の目的でした。最初に問題にありましたようなノートテイク。それから、リーディング、情報収集の方法、レポートの書き方、プレゼンテーションというようなコンテンツをたとえば半期の授業でしっかり身に付けてもらえるようなものを作れないだろうか、というふうに考えました。

当時、もしこういうコンテンツが全部入った教科書があれば、多分作ってなかったと思うんですけども、当時はなかっ

たんですね。たとえば、ノートの取り方だけの本とか、本の読み方だけの本とか、レポートの書き方だけっていうのはあったのですが、それらを全部教科書に指定して、学生に持ってもらえるかというと、それちょっと難しいわけです。最初は実は一般の書店には並ぶものではなくて、印刷屋さんをお願いして、製本した形で作りました。これを1年間授業の中で走らせました。内容をさらに精査をして、その次の年に、「知へのステップ」というので、最初はこういうテキストでこういうデザインだったんですね。

で、今一番新しい第三版がこういう形になっております。先ほどの五つのコンテンツを十五回の授業に落とし込んでいくと、大体このような形になります。

基本的には一回につき1章なんですが、たとえばガイダンスであたりたり、コンピューターを使う場合には2回に分けてやつたりしますので、これで大体半期15回の授業に落とし込めるような形になっています。

「学習技術」で学ぶスキルというのは、テキストの中にもあるんですけども、九つの能力を設定しました。聞く、読む、書く、という中心になるスキルと、一番センターに考えるを置きます。これイメージなんですが、自分の頭の中でこういう能力を養成していくっていうイメージだによって伝えていまして、調べる、整理する、まとめる、表現するというのがあって、それを第三者に伝えるという、そういう九つの能力を身に付けるのがこの教科書なんです、というふうになっております。

関西国際大学の初年次教育というのは、本学は先ほど申し上げましたように、ツインキャンパスにはなっておりますけれど

も、学生数も二〇〇〇人ぐらいで少ないですし、ということは一学年は大体四五〇名ぐらいなんです。それが二つのキャンパスに分かれてますので、全学共通で、共通教育科目という形で運用しています。その中にコモンベシックスというカテゴリーがあります、その中にさらに初年次教育というカテゴリーがあります。ここですね。

初年次教育としては、「初年次セミナー」。これが多分こちらでやられている「導入基礎演習」のような授業ではないかと思っています。一学年の春に必修の授業で行いまして、それを受けて、秋に基礎演習というゼミになります。

「学習技術」は必修です。その他、「サービスマーケティング」、「リサーチ入門」という授業があります。「リサーチ入門」というのは、本学ではすべての学生が卒業するまでに一度は海外経験をする事になっており、向こうで調査をしてくるというようなことになっていますので、最低限の調査の基本としてのこの「リサーチ入門」という授業の中で学んでいます。

この「学習技術」で学んだことが、同時期の「初年次セミナー」であったり、秋学期の「基礎演習」につなげていくという形で、初年次教育のカリキュラムが成り立っています。

この「学習技術」というのは、実は一番メインは春学期、入学したてのときというのが一番メインの時期になります。対象になるのが、春に入学してきた日本人の学生ですね。たとえば今年の場合は人間科学部、三木のほうでは七クラス同時開講しています。教育学部の方は、定員が多いので、九クラスに分けて、大体一クラスが三十名から最高でも三十五名で止まるように設定をしています。これも学生数が少ないからできるという

うことだと思っています。これだけのクラス数がありますので、担当教員も十六名います。

必修ということになると当然再履修の問題が出てきます。再履修をどうカバーしていくのかということで、本学は夏学期と冬学期というのがあります。夏学期と冬学期は再履修のクラスだけ実施をいたします。春はそれぞれの学部、あるいは学科でクラスを編成しますが、再履修に関して各学科でやっている、ものすごくコストパフォーマンスが悪い状態になりますので、各キャンパスで1クラス開いて、とにかく早くこの単位を取らせるために、夏冬夏冬でやっていきます。

春に入学した日本人学生と別に、春に入学した留学生は、まず日本語の勉強を中心をやってもらいまして、日本語の単位を取り終えてから、秋に半期遅れの形で「学習技術」を受けるという構成になっています。この時期を特に本学では導入学期と呼んでいます。一応GPAはつきますが、卒業論文を書くときに累積GPAが一、五以上ないといけないというルールがあるんですが、その中にはこれを入れてないんですね。最初の学期はまだ助走期間ということなので、入れないということになっています。で、ここに先ほど言いましたような「初年次セミナー」や「サービスマーケティング」があります。それから、本学は入学した時に全員がノートパソコンを所持することになっていますので、たとえばネットワークの設定の仕方などほかの授業にもすべてにかかわるようなものを学ぶ「コンピューター・リテラシー」という授業もこの時期に同時に行っています。今年度の春学期は半期十五回なんですけど、初回にガイダンスをして、授業十四回ということで十五回ですね。複数の教員が

同時に授業を担当してはいますが、統一の教材ですね、先ほどご紹介しました、この「知へのステップ」であったり、それから教授資料など補助教材も使いまして、クラス差が生じないような工夫を考えております。

毎回、ワークシート、これが一番授業の肝になるんですけども、これを実践して提出をして、翌週に添削をして返すので、担当の先生はすごく忙しいんですね。だから30名を超えないようにということの設定をしています。

これが全学共通のシラバスで、これはウェブ上のシラバスなわけですけれども、私がコーディネーターということで、教科書を作ってしまった行きがかり上、ずっとコーディネーターもやっています。コーディネーターが一つシラバスを作って、それをみんなが共有して同じものを使うっていう形で十五回のもので、予復習の時間もここに書き込まれています。次の時間までにこんなことをしてください、復習としてはこんなことをしてくださいね、ということシラバスには明記しています。一年生ですので、最初はこれを印刷して渡しています。それをもとに進行を確認しながらやっております。

ちょっと古い写真ですが、二〇〇二年の授業風景で、このときは二クラス合同でやっているんですね。最初のころはやはりコンピューターがちょっと苦手とか言われる先生もおられたので、じゃあそういう先生は「学習技術」を担当できない、持たないのかということになるので、コンピューターのときだけ合同で、ちょうど私が真ん中ぐらいで操作をしているんですが、後ろから見るとこんな感じですよ。図書館のOPACをみんなが検索している様子ですね。時々後ろから見ると違う画面の人が

いたりするんですけど、このときはちゃんとみんな同じところを開いてくれていてよかったなと思います。二クラス合同ということも、同時開講なので可能だということですね。

等質なクラス運営をするということで、そもそも教員のほうは「学習技術」の専門家はいないわけですね。特にこれやり始めた当初はそうですし。実は私自身も教育学の専門家ではないんですね。もともとは文学をやっていて、言語文化を大学院からやっていますので、ベースとしては人文系の人間なんです。別に教育学専門でプロフェッショナルでもない。もつ

とえば、担当する教員はいろんな専門家がいますよね。それこそ、コンピューター使う先生もいれば、英語や福祉や社会学、そして体育の先生も持たれるわけですから、それぞれ皆さんバックボーンが違っていていかないといけないわけなんです。それをどうつないでいくのかというのが一つが共通シラバス、あるいは教材であったり、ワークシート、教授資料とか、そういったものを使うことに使うことによって、等質のクラス運営というのをやらないといけないわけです。学生にとっては必修ですので、クラスを最初から当てられるわけですね。選べないのに、クラスによって差がある、もつと悪い言葉を使うと「当たり外れ」があるというのはまずいわけですね。ですので、等質運営ができるようにということで、裏のほうではいろんな仕掛けをやってあります。

ワークシートもこういう感じで、毎回いろいろパターンがあるんですが、これはちょうどリーディングのところですね。こういうふうなワークシート。実際はB4のものなんですけれども、使っています。教授資料も実はこれが虎の巻でして、こ

う狙いであつたりバックグラウンドとか、解答例とかも書いてありますし、一番大きいのはこれなんです。九十分の展開例というのを必ず毎時間の授業に書いてあります。もちろんこれは本人がアレンジをして、九十分に収まればいいんですけれども。得意な回はごくしゃべるんだけれども、そうじゃないところは適當、みたいになると困るので、必要最低限、これだけは外さないでくださいというのが、この教授資料の中には入っています。ですので、この通りやれば九十分で終わるといふものなので、大学の先生が一番やりたくないパターンの(笑)

授業の教材がそろっているということです。

ワークシートはテストではないので、このようにあらすじを表すものなんです。授業中に配り、集め、返却し、ファイリングする。実際にはこんな感じでやっていますね。これが実際の授業です。最終課題は最後はテストではなく、レポートを設定していますので、最後はこういう評価のシートがありますので、これをつけて採点をして学生に返しています。学生はそれを見て、ほかの授業でも生かせるようにとやっています。

この評価基準も全部決まっております。留学生でも同じ評価基準でシラバスに明示されております。この通りに評価基準を定めてやっています。再履修に関しては、先ほど申し上げましたように、十名から二十名なんです。たとえば普段の授業ではできない、図書館に実際に足を運ぶの文献検索を入れるようにしています。まったく同じ授業をやるのと飽きてしましますし(笑)。一日三コマの五日でやりますので、ちょっと違う授業編成、再履修編成をしましてやっております。

そもそも、なぜこの授業を落としたのかということをちゃん

と見てもらわないといけないので、自己分析も授業の中でやってもらっています。

まとめとして、受講生たちの感想としては、当たり前なんです、レポートの書き方がわかりました。従来は感想文との違いがよくわからなくてやってたけどもわかるようになりました。あるいは、大学生としての学習への取り組み方ですね。自発的、能動的な態度が大事だということに気付いた。タイムマネジメントが大事だということもわかった。あるいは、図書館が本を借りるところだけではなくて、情報を集めるところだっということがわかった。こういうことを言ってくれています。

「学習技術」の意義としては、学生にとってはやはり高校と大学の接続であり、受動的なスタイルから主体的な学びへ移行させるもの。そして、アカデミックスキルの養成であると。で、全クラスで等質の内容が受けられるということ。教員にとっては初年次学生の実態が理解できますし、それを自分のほかの授業にも指導に活かすこともできます。そして、副次的ではありますが、担当者が集まって様々な意見交換をしたり、新規の担当者は授業のためにFDもやります。このような授業を本学、関西国際大学では実施をいたしております。以上、ご報告させていただきます。どうもありがとうございました。

(つえむらかずみ・関西国際大学人間科学部ビジネス行動学科教授)